ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く 其の5

「普天間飛行場④」

あらまし　市民が営んできた生活の直接的な証である普天間飛行場の「重要遺跡」を、引き続き紹介します。

赤道渡呂寒原古墓群　この古墓群は、普天間飛行場の東側に広がる戦前来の緑地帯にあります。そこには、自然の岩陰をそのまま利用した岩陰墓や素掘りの掘込墓、ていねいに切石を積んだ亀甲墓や破風墓などの色々な形の古墓があります。

古墓群の一所は、地元でナナチバカと呼ばれ、七基の亀甲墓を主に十二基の古墓が横一列に並んでいます。そのうち、三基の亀甲墓には一七三六年、一七五八年、一八二七年と墓造りの年代が記されています。沖縄県で年代が分かる亀甲墓はそれほど多くはありません。ナナチバカは、市はもとより沖縄県にとっても重要な歴史・文化遺産といえます。

赤道渡呂寒原屋取古集落　約三百年前に、首里や那覇の士族が一時的に田舎に身を寄せた人々の集落は屋取と呼ばれ、特に明治十二年の廃藩置県以降に多くなります。赤道の屋取もその一つです。

この古集落には、戦前のままの四つの屋敷跡があり、そこには沖縄の伝統的な民家の母屋・台所・離れ屋・豚小屋兼便所・井戸などの施設が保存良く残されています。また、ビロウやガジュマルなどの屋敷林もあり、市はもとより沖縄の伝統的な庶民生活を知る重要な遺産です。

△赤道渡呂寒原古墓群［ナナチバカ］

△古墓群内の亀甲墓［1736年］

△赤道渡呂寒原屋取古集落の屋敷跡

問合せ：文化課 ☎893-4430

茶ぐわーゆんたく 105

フーチビーサと鍛冶職人

旧暦12月のムーチービーサ(この頃の冷え込みを表す言葉)がやってきました。冷え込む季節を表す言葉にはもう一つ、旧暦11月のフーチビーサがあり、これは鍛冶屋カンジャーヤー)に関わる言葉です。

鍛冶屋は鉄を叩いて鍛え、様々な製品に加工する職人のことで、刃物を作る刀鍛冶はよく知られています。宜野湾市はもとより、沖縄は戦前まで農業・漁業・林業などが主な仕事で、鍬や鎌、モリや斧といった道具を作りだす鍛冶屋は、仕事を支える重要な職業でした。市内では戦前、普天間・野嵩・宜野湾(2軒)などに鍛冶屋が確認されており、野嵩のカンジャーガマ、神山のカンザーグワー、嘉数のカンジャーグワー【屋号】、大謝名のカンジャーガマなど、地名や屋号にも鍛冶屋の姿が伺えます。また、察度王にも鍛冶に関する伝説があります。

さてフーチビーサの由来ですが、鍛冶屋には熱い鉄を水に入れて冷やし固める「焼き入れ」という仕上げの技法があります。水が冷たいほど良い製品に仕上がるため、旧暦11月の冷え込みのことを、鍛冶屋の道具である鞴(フーチ)の名前から、フーチビーサと呼ばれるようになりました。

このような鍛冶屋も日本復帰の後、安価な工業製品に押され、現在では県内に1、2軒が残るのみです。沖縄では漆器や花織などの伝統工芸が注目を集めていますが、消え去ろうとしている鍛冶屋の技術も、同様に見直したいものです。

（文責　金城良三）

鍛冶屋の道具（市立博物館所蔵）

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）
☎870-9317